

## 上演⑩ 岐阜高校「エンセオジュン」

まずはプログラムに書かれた「自分たちが演劇で本当に伝えたいことは何かを全員が自問自答した」というメッセージに痺れた。本人たちにそれを伝えると、手違いで掲載されたとのこと。でもおかげで私は作品に込めた熱い思いを知ることができ、深い感銘を受けたのだ。悪くはないと思う。

独特な世界観である。舞台は昭和初期？の人里離れた寒村にある精神病院らしい。主人公一郎の周りで起こる不可思議な世界。これが一郎の妄想なのか、現実なのかわからないまま物語は進んでいく。セリフの端々から一郎は母親にべったりな幼少期を過ごし、でもなぜか母親は突然、自死したらしく、その影響で？母親に似ている妹に入れ込んでいるということが段々とわかってくる。一郎は「父親が妹を殺した」と言うが、父親は反対のこと、つまり「一郎が妹の巴を殺した」と言う。病院の先生が一郎と父親の媒介になり、正反対の事実を提示する構造だ。そこでようやく一郎は精神分裂病（統合失調症）で、舞台上で起きていた出来事は一郎の妄想らしいことがわかってくる。物語の後半、第三者視点での会話が同時多発的に、しかも暴力的に展開される。正直、観ていて理解が追い付かないシーンではあったが、逆にそれが圧力を生み、圧倒的なうねりで自分に襲い掛かってきたように感じた。そしてこのシーン、「依存」というワードが頻出する。すなわち本作の重要なキーワードであり、主題である。どうやら一郎は厳格な父性に抑圧を感じ、優しい母性に「依存」していたらしい。しかし突然、舞台は急展開する。なんと実際の脚本家が現れ、一郎に問い掛けるのだ。「今までここで起きていたことは演劇であり現実じゃない（私が解釈した文章であり、実際のセリフではない）」と。それを受け、一郎は、「人は誰も生きていくうえで理想の他人に依存しているのだ（同）」と客席に投げかけ終幕する。しかも実際のスタッフが舞台のバラシをする中で。つまり舞台上の自分（＝一郎）は君たち自身でもあるという問い掛けでもあったのだ。いわゆるメタ構造ではあるが、物語を傍観していた？客席に一気に冷や水を浴びせ掛ける岐阜高校演劇部一同の志とエネルギーにまた痺れたことを正直に告白しておく。